

カラスくん

おはなし 木原 美香子
はりえ 中村 麻美





長い冬が終わり、木々はうすみどり色のヴェールをかぶりました。飢えと寒さに息を潜めていた森の生き物も自由に動きまわり、待ちこがれた春を楽しんでいます。やさしい風が花の香りを運び、小鳥たちのさえずりが森中を満たしました。森に子育ての季節がやってきました。

「さて、今年はどんな子どもたちがやってくるかな？」

小鳥の学校の年老いたフクロウがつぶやきました。

春も深まり、やがて森中から小鳥の子どもたちが学校に集まってきた。ひばり、つぐみ、ルリカケス、キツツキもカッコウもいます。セキレイ、カワセミ、コマドリ、カラス、ミソサザイ、、、ピイピイ、チュッチュッそのにぎやかなことといったら。フクロウは少しまぶしそうに目をパチパチさせました。

「おはよう、みんな元気だね、私が今日からみんなの先生ですよ、仲良くしましょうね」

「ハーイ」

「ハーイ」

一勢にかわいい声が返ってきます。フクロウは続けました。

「今日からみんなはこの学校の生徒になりました。みんなは学校って何をするところか知っていますか？」

「ハーイ、べんきょうです」、「べんきょう、べんきょう」

子どもたちは口々に答えます。

フクロウは生き生きとした子どもたちの様子をニコニコとみていました。

「そうです、よく知っていますね、先生がこれから教えることは、森で生きていくためにはとても大事なことばかりです。おめめとお耳を大きくあけて先生の言うことをよく聞いておぼえて下さいね」

「ハーイ」

子どもたちは素直に答えます。先生はひと渡り子どもたちを見まわして続けました。



「さて、学校にはもう一つ大切な事があります」

「ハイ、お弁当です」

太っちょのミソサザイが答えると、みんなピイピイとお腹をかかえて笑いました。フクロウはニッコリしてミソサザイに答えました。

「そう、一生懸命勉強すればお弁当の時間は楽しみですね。だけどこれはもっともっと大事なことなんです」

フクロウは少しまじめな顔になりました。子どもたちは

「もっともっと大事な事ってなんだろう」

と先生を見上げました。フクロウは子どもたちが丸い目をもっと丸くしてじっと見つめているのを眺めると、ゆっくりと話し始めました。

「それはね、学校はたくさん遊んで友達をいっぱい作るところだということです」

どんなにむずかしい答えが返ってくるかと胸をドキドキさせて聞いていた子どもたちは、ホーッと息について

「なんだ、ボク遊ぶのダーイスキ、お友達だってたくさんいるよ」

と口々に言いあいました。

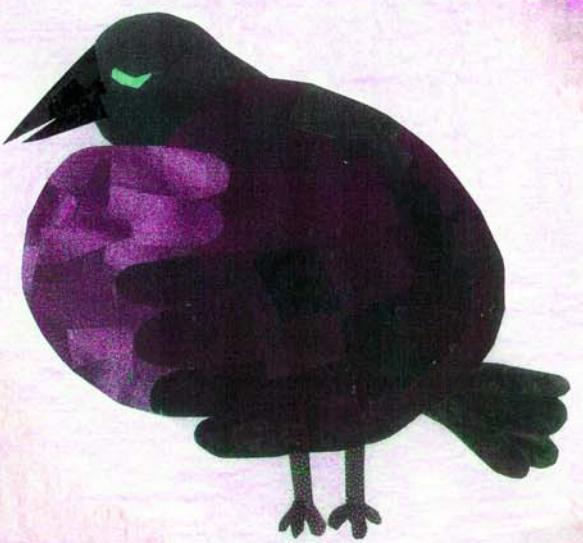
「今日からみんなはこの学校のクラスメイトです。よく勉強して同じくらいよく遊んで、友達をいっぱい作って楽しく過ごしましょう。先生のお話しさはこれでおしまい」

フクロウの話を聞いて子供達は何とうれしく思ったことでしょう。

「そうか、学校って勉強するだけでなく、たくさん遊んで、友達をいっぱい作るところなんだ。なんだ、学校ってなんだかたのしそうなところみたいだな」

子供達は顔を見合わせてにっこりしました。

わんぱく坊やは前の子のシッポの羽根をつんづんひっぱっていたのですがやめました。その子がふりむいて笑ってみせたので、わんぱく坊やはすっかりうれしくなって舌をチョロリと出しました。何だか明日から楽しいことがまっていそうだ、そんな気がしてみんな元気にとび出していきました。



森の緑も濃さを増し、日差しは徐々に強くなってきました。夏の訪れを感じはじめる頃、小鳥の学校の生徒たちも見違えるほど立派になってきました。風を切って飛ぶ羽も力強く、さえずりも美しくのびやかになりました。

フクロウの言うとおり、みんなは森で生きていくために様々なことを学びました。虫のとり方、魚のとり方、おいしい木の実と毒のある実の見分け方。危険を仲間に知らせる方法、男の子たちは女の子にささげる美しいさえずり方まで学ばなければなりません。巣の作り方、越えてはいけない境界線、特に人里には決して近づいてはならないと、きつく教えられたのです。

山ほど勉強して遊んで、友達もたくさんできました。こぜりあいはあっても、大きな争いもなく、楽しい毎日が続きました。夕方になると子どもたちはそれぞれ群れをつくると帰って行きます。

「今日もみんな元気に過ごせたな」

フクロウはホーッと一息ついて静まりかえった教室を見まわしました。するとすみっこに、一人ぼっちで残っている黒い姿がありました。カラスでした。カラスはまるい目に涙をうかべて、みんなの飛び去っていく方を一人でみつめています。

「カラス君どうしたの？」

カラスはあわてて翼で顔をかくしました。

「どうしたのどこか痛いの？先生に言ってごらん」

カラスはうつむいてしまいました。何も答えが返らないまま、静かな教室がやがてワイン色にそりました。

そしてとうとうカラスは心配そうなフクロウを残して飛び立っていました。



次の朝、学校へ行く時間が来ました。けれどもカラスはぐずぐずとしていました。お母さんが、

「早くしないと遅れますよ」

と何度も呼んでもちっとも起きてこないのです。お母さんはとうとう、カラスの寝床まで起こしにきました。

「早くしなさい」

お母さんはあわてています。カラスは小さな声でぽつりと言いました。

「ぼく、おなかがイタイ、、、」

言ってしまうと本当におなかのすみっこがしくしく痛み始めました。

「えっ？おなかがいたいの、どうしたのかしら」

お母さんはカラスのおでこをさわったり、くちばしをあーんとあけさせたりしました。

「熱はないようね、少し休んでいれば良くなるわ、少し遅れてもいいから直ったら学校へ行きなさい」

カラスはほっとしてベッドにもぐりこみました。ベッドは暖かくてやわらかくて、そこにいると、とても安心できました。やがてカラスはウトウトと眠ってしまいました。遠くからお母さんの声が聞こえます。

「よく眠っていたわね、もう痛くなくなったでしょう、気をつけて行くのよ」

カラスはのろのろ、のろのろ支度してゆっくり、ゆっくり学校のほうへ飛んでいきました。

お母さんはその後ろ姿を見て、そういえばこの頃は前のようにはりきって飛んでいかなくなってしまった事に気がつきました。何かあったのでしょうか、お母さんは心配そうにいつまでもカラスを見送っていました。



カラスは飛びながら学校のことを考えました。すると翼は重くなり心も重くなりました。ふかいため息がカラスのくちばしから何度ももれました。そのうち涙がにじみでてきてまわりの景色がゆらぎはじめました。

カラスはまわれ右をして、学校とは反対のほうへ飛んでいきました。そして一日中森のなかをうろついていました。でも学校のことはかたときも頭から離れません。

「先生心配してるかな？学校へ行かなかったってわかったらお母さんおこるだろうな、僕はどうしたらいいんだろう」

カラスは夕焼けの中を泣きながら飛んでいました。涙でくもった目にぼんやりと山が見えました。カラスはその山を目指すかのようにまっすぐ飛んでいきました。

「先生は僕が泣いていたのを見たかな、もし僕がコマドリみたいに陽気だったら、ウグイスみたいに歌がうまかったら、みんなはぼくと仲良くしてくれるかな、もし僕がセキレイみたいにきれいでキツツキのように愉快だったら僕と遊んでくれるのかな？ああ、僕は何かみんなに嫌われるような事をしちゃったのかしら？どうしてみんなは僕を仲間に入ってくれないんだろう、、、」

学校が始まった頃、カラスはとても張り切っていました。たくさん友達をつくるんだ、一生懸命勉強もするぞ、、、毎日はずむ心を抱いて、朝になると学校目指してまっすぐに飛んでいったものでした。

しかしクラスの仲間は違っていました。カラスが話しかけても返事をしなかったり、遊びにも誘ってくれません。みんなでカラスの方を見ながら小さな声で話しあっていたり、気がつくとまわりには誰もいなかった時もありました。



カラスは毎日みんなと一緒に学校ですごしていました。でも心はずっと遠いところに一人ぼっちで置き去りにされていたのでした。それは本当に一人でいるよりもずっと孤独な事でした。それにこれは誰にも言えなかったのです。お母さんや、お父さん、大きい兄さんや姉さんたちにも決して言えないことだったのです。それどころかカラスは先生に知られたら、先生も僕を嫌いになるかも知れないと思い、悩んでいたのです。

カラスは悲しみにとらわれた心を抱えて飛んでいきました。「カーア、カーア」夕ぐれの森に淋しげなカラスの声がひびいて、その泣き声に森の木々も枝をふるわせました。夕日が山のむこうに沈むころ、とうとうカラスは飛び続ける力もなくなり、バサリと地面に落ちてしまったのです。

暗闇がしのびる中でカラスは静かに横たわっていました。胸の奥にぽっかりと穴があき、そこからあふれ出た悲しみは涙になってカラスの目から流れ落ちました。まるで底の無い沼にとらえられてしまったように、カラスは悲しみの中に身を沈めていきました。夜の暗さも恐ろしさも、カラスには感じられませんでした。心の中で絶望が頭をもたげはじめました。

「もうダメだ、僕はいつまでも一人なんだ。みんなに嫌われて生きていくんだ。本当は僕は楽しく学校へ行きたかった。いろいろな事をおぼえたかったし、友達も作りたかった。みんなと遠くへ飛ぶ競争をしたり、、、。遊びたかったんだ。それなのに僕を仲間に入ってくれる子は誰もいないんだ。」

「神様、僕はどうしたらいいのですか？このままみんなに嫌われているまんまなの？」

カラスはもう泣く気力さえ残っていませんでした。じっと息すらもしていないかのように倒れていました。まわりの木々はカラスの嘆きを聞いていました。

カラスの小さな身体と心は悲しみでひきさかれているようでした。ですから何もしてやれない



自分たちを嘆いて、せめてカラスの子が凍えてしまわないようにと柔らかな葉を落として毛布のようにすっかり被ってやったのでした。

カラスの子はわからなかつたのですが、その時神様は遠い天国にいらっしゃつたのではなく、カラスのかたわらでその悲しみにじっと耳をかたむけていらっしゃつたのでした。そして空をあおいでちょうど東の山の端からのぼってきたばかりの月にお命じになりました。カラスに力をかけてやるようになると、、、。

そこで月はその光の腕を地上に向けてすると伸びました。青白い光は厚くつもつた葉のすき間を通してカラスの羽にふれました。月はカラスが低くすすり泣いているのを感じて空からそっと呼びかけました。

「おい、カラスの坊や、そんな所でねむってはだめだよ。早くお母さんのところへお帰り、私が道を照らしてあげるから」

カラスは誰に呼びかけられたのかわからず、うっすらと目を開けました。痛んだ羽に光があたっていました。昼間みるお日さまの強い光とはちがつた、ひんやりとした静かなやさしい光でした。カラスは安心したのか又目をとじてしまつたので、月はありつたけの光をカラスの上にふりそそぎました。

「おい、おい、寝ちゃだめだよ、飛ばなくちゃ」

月はまた話しかけました。

「いやだ！！」

カラスは夢から引き戻されたのを怒って、月の言葉をはねつけました。

「僕をほっておいて下さい。このまますっとここにいたいんです」



月は驚いてカラスをよく眺めました。まだ幼いのに疲れきったその顔は子どもらしい命の輝きのかわりに、悲しみの宿る瞳だけがめだっていました。月はますますその光を強く集めました。そうしないとその黒い小さな姿は、今にも夜の闇にすいこまれてしまいそうに思えたからです。月はまた、やさしく話しかけました。

「私はおまえをほってはおけないよ、おまえの悲しいその顔が私の心に焼き付いてしまったからね、おまえがこの闇の中に消えていくのを、とてもだまって見てはいられない。さあ、私の所へおいで」

「いやです、僕はつかれているんです」

カラスの子がつぶやくように、そう言ったとき月はくらやみの中から絶望がカラスにひっそりと近づくのをみました。それは煌々と照る月明りの森の中、木立がつくる闇の中でも特に深い闇に潜むいまわしいものでした。

そこで月は急いでカラスに言いました。

「大丈夫だよ、おまえは飛べる。私の光には魔法の力があるのだよ。羽は軽いし体だってもういたまないだろう、さあ、おいで」

カラスは月の言葉を半分疑いながらも、静かに羽根を動かしてみました。すると本当にどこもいたくないです。体は空気のように軽く、不思議な力がみなぎっていました。フワリと空中に舞い上がったカラスは月に向かって飛びはじめました。

絶望はそのするどい指先をのばしましたが、すんでのところでカラスをつかまえそこないました。そこで近づいてきた時と同じように音もなく、するすると闇の中へ戻って行つたのです。

天の高みから一部始終を見ていた月は、カラスを天高く抱き上げました。



いつの間にかカラスは森を離れ、虚空にぽかりと浮いていました。プルシャン・ブルーの天幕につけられた宝石のようにきらめく星々、耳もとをうなりをあげて通りすぎる青白いほうき星、バラ色に渦巻く星雲。天空を横切るけむるような銀河。美しさに魂を奪われ声も出さないカラスに月は語りかけました。

「美しいだろう、でもあの星たちは本当はもう存在しないかも知れないんだ。何故ってあの光は何百年も何千年も前に星が放ったものなんだよ。光は何もない宇宙空間を気の遠くなるような時間をかけてやってくる。それは星を見る者の心の中に感動を呼び起こすためにだけ、旅をしてきたとも言えるだろう。あの星たちもお前に美しい光をとどけて、何億年という一生を終えたかも知れないんだよ」

カラスはそれを聞くと夢を見ているようなまなざしで、宇宙をみまわしました。

「このふりそそぐ、すべての光は僕の心に届くために旅をしてきたんだね。もう消えてしまった星たちの放った最後の光だったかもしれないんだ…。わあ、なんてすごいんだ。」

悲しみにいじけた心の底から、喜びが突き上げてきました。

「星のエネルギーが僕の心にいっぱいになった気がする。こんなに美しく、すばらしい星空を見ることが出来たのは僕だけだろうな、僕たち鳥は夜になると目が見えなくなるもの、この星の美しさは誰も知ることはないんだ」

暗い丸天井にちりばめられた星の静かな光、それはまるで天の礼拝堂のようでした。カラスはその時星の美しさだけでなく、この広い宇宙を満たす不思議な力とともに、やさしく見守るまなざしをも感じることができたのです。



「そうだ、 生きている、 そのことだけでいいんだ。」

カラスの心は平和で満たされ、 生きる力がわいてきました。 この気持ちをどう言ったらわかってもらえるだろう、 カラスの子は月の方を振り向いて感謝をこめて微笑みました。

「僕は一人ぼっちじゃないんですね、 お月様？」

そうだよ、 誰一人いないと思っていても、私はいつも空からおまえを見ているよ。 夜になって私が空に居ないときは、 昼間の空をさがしてごらん。 白い影のような私がきっと見えるから。

月はそう言うとカラスの子を地上にかえし、 厚くつもった葉の下におろしてやりました。 カラスは満足そうな微笑みをうかべて、 眠りにおちていきました。



朝になりました。 授業が始まる前のザワザワした教室でフクロウはカラスの姿をさがしました。 カラスは今日も来ていません。

「カラス君は今日もお休みしているね、どうしたのかな？知っている子はいないかな」
誰も答えません。

「カラス君と仲の良い子はいないの？」
みんな静まりかえって顔を見合わせています。
フクロウの頭の中に泣いていたカラスの小さな後ろ姿がよぎりました。

子どもたちは困ったようにもじもじして、下を向いています。

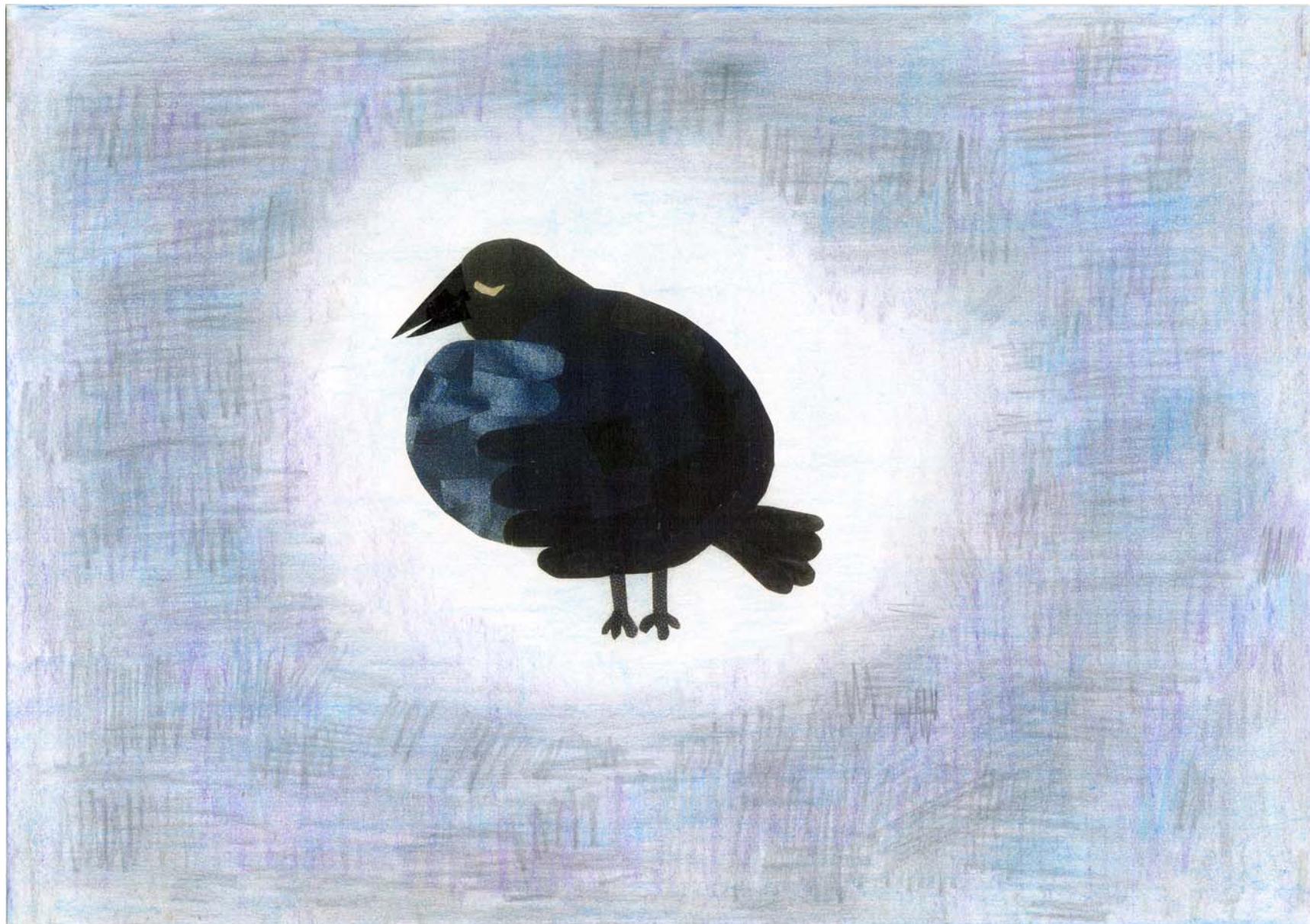
「みんなカラス君とけんかをしたのかな？」
フクロウはやさしく問かけました。するとコマドリが怒ったように言いました。

「誰もけんかなんかしてません。でも、、、」
「でも？」
「カラス君って、大きくて黒くて、くちばしがすごく怖そうで、声も僕たちとぜんぜん違ってる。だから、、、だから僕たち何だかカラス君がいやなんだ、遊びたくないし、何か怒ったら怖そうだし、、、」

フクロウはウーンとうなって、腕組みをしました。そしてカラスが夕暮れの教室で一人泣いていたことを思い出しました。

『そういう事だったのか、あの子はあの日皆の楽しそうに帰って行く姿を見て、泣いていたんだ。わたしはなぜ気がついてやれなかったんだろう。毎日毎日、一生懸命子どもたちに生きる術を教えながら、肝心なことを教えてやれなかった』

フクロウは深いため息をつきました。



『わたしは毎日カラスを見ていたのに、 カラスの子のつらさに目を向けることをしなかった。 みんなが仲良く楽しくやっているのを見て、 たった一人その輪に入れないでいる者がいることに気がつかなかった。 あーあ、 カラスの子はどれほど辛い毎日をがまんしてきたことだろう』

その苦しさを誰にも気付かれないようにしていたカラスが、 フクロウはふびんでふびんで仕方なく、 また自分のおろかさが情けなく、 言葉を失っていました。 だまってしまったフクロウを見て子どもたちは思いました。

「先生おこるかな」

「きっとみんな、 すごくしかられるんだ」

「先生こわい顔になっちゃった。 あんな先生見たことないや、 どうしよう」

心臓が小さな胸のなかでドキドキとおどりだします。 子どもたちはみじろぎもせず、 じっとフクロウを見ていました。 やがてフクロウが静かな声で話しあはじめました。

「みんな、 先生のはなしによく聞いてね。 でも、 その前にちょっと目をつぶってください」
フクロウは続けました。

「だれかカラス君に脅かされたり、 つつかれたり、 いじわるをされたりした子はいるかな? いたらそっと手をあげなさい」

手はひとつも挙がりません。

「カラス君がおこって、 こわい思いをした子はいますか」

やはり手はひとつも挙がりませんでした。

「カラス君は誰にもいやな事は、 していなかったんですね」

フクロウはそっと言いました。 その声があまり悲しそうなので、 子どもたちは思わず目を開けて先生を見上げました。 フクロウの年老いた頬は、 涙で濡れていきました。

それを見て子どもたちははっとしました。 叱られるかと思っていたのに、 あのやさしくて大き



なフクロウ先生が泣いているなんて、僕たちのしたことはそんなにも悪いことだったのだろうか。

子どもたちはそれぞれに自分に問かけてみました。

『私のしたことってそんなに悪いことだったの？話しかけられても知らんぶりしたり、一緒に遊ばなかったり、そんなことはみんなやっているじゃない、、、。大きなカラスくんが、何も言わずにうつむくのが面白かったし。』

みんなの目に、いつも一人ぼつんとはなれてこちらを見ていたカラスの姿がはっきりとうかびました。

教室の中で話しかけてくれるのを待っているカラス、期待にふりむいた目が、失望で曇っていくのを思い出した子もいました。

『友達が待っているから楽しく通える学校なのに、来ても誰もカラス君を待っている子はいなかつたんだ。もし自分がカラス君と同じことをされたら、どんなだろう？きっと学校なんか来なくなるに決まってる。』

子どもたちは一生懸命考えました。そしてカラス君のつらさがどれ程深いものかに気付きました。彼等は自分たちのしたことが本当にいけないことだったのがわかったのです。そして、意地悪な自分たちを恥ずかしく思ったのでした。

やがてツグミが顔を上げて、決心したように話しあげました。

「先生、、、私たちみんながカラス君を学校から追い出してしまったんですね、わざとやった訳ではないけれど、悪いことにはかわりはないんですね。今から私、カラス君のおうちへ行ってあやまってきます。許してくれたら一緒に学校へ行こうって言ってみます」

するとクラスの子が次々に、自分も行くと言い始めました。そこで小鳥たちはふくろう先生と一緒にカラスの家に向かって、一勢に飛び立ちました。



カラスの家は森のはずれの、 古い松林の中にありました。 たくさん的小鳥たちがやってきたので、 カラスのお母さんがおどろいて出てきました。

「カラス君いますか、 私たちあやまる事があって来たんです」
と、 恥ずかしいのを我慢して子供たちは小さな声でたずねました。 自分たちが意地悪をしていたカラス君のお母さんの顔を見て話すのはとても難しいことでしたから。 すると驚いたことにカラスは昨日学校へ遅れて出て行ったきり、 戻ってこないというのです。

「明るくなつてから、 お父さんやお兄ちゃん達が森の中をさがしているのよ。 でも、 まだ見つからないの、 けがをして飛べなくなっているのかもしれない…。」

カラスのお母さんは、 本当に疲れきった顔をしていました。 一晩中眠れなかったのでしょうか。 目も赤く腫れぼったくみえました。

みんなは申し分けない気もちで一杯になりました。 自分たちもカラス君をさがしに行きますと、 約束して松林から森中に散らばっていきました。

小鳥たちはカラスを探して飛びまわりました。 いつもは行かない暗い森の奥も、 霧の立ちこめる谷も、 高い山の中腹さえ怖いのを我慢して飛び続けました。 やがてカッコウがカラスの眠っている場所にたどり着きました。

「おーい、 おーい、 カラスくーん、 どこにいるのぉ？」

その呼び声にやさしい木々が目を覚ました。 しばらく顔を見合わせていましたが、 やがて一本のヒマラヤ杉がカッコウに声をかけました。



「カッコウの坊や、 どうしたの」

「カラス君をさがしているの、 カラス君昨日学校に来なかつたんだ…おうちにも帰っていないんです」

「どうしてカラス君は学校に来なかつたのかしら？」

「それは、、、 それはみんながカラス君を仲間はずれにしたから学校にこられなくなつたんです。 淋しくて悲しくて、 それでどこかへいっちゃつたんだ」

カッコウは説明しながらも心配のあまり、 なみだ声になってきました。

木々は言いました。

「私たち、 カラスの坊やがどこにいるか知つてゐるわ。 昨日暗くなつてから私たちの足元におちたの。 長いこと泣いていたわ。 私たちにはあの子の心にぽっかりあいた、 暗い穴が見えるようだつたの。 あの子は死んでしまつたいくらい辛かったのよ」

それを聞くと、 カッコウはハラハラと後悔の涙を落としました。

「何てひどいことをしてしまつたんだろう、 死にたいと思うなんて考えなかつたんだ。 もしカラス君が死んだら、 僕たちのせいなんだ。 どうしよう、 どうしたらいいんだろう？」

カッコウは声をあげて泣きはじめました。 ヒマラヤ杉は言いました。

「さあ、 泣いてないでがんばって飛びなさい、 そしてお友達をつれてもどつていらっしゃい」



「それからこの葉っぱの下で眠っている、カラス君を起こすの。カラス君が目をさますまで、みんなで暖めてあげるの。さあ早く早く」

ヒマラヤ杉にせかされてカッコウはあわてて涙をふきふき仲間を呼びに行きました。やがてカッコウに案内されて、クラスの小鳥達が飛んできました。

ヒマラヤ杉の言うとおり、葉っぱの下にカラスは居ました。眠っているカラスはとても小さくて、はかなげに見えました。

『どうして僕たちはカラス君をこわいと思ったんだろう、友達になれないと思ったんだろう？どうしてカラス君の本当の姿を見ようとしなかったんだろう？』

小鳥たちは輪になってカラスを囲み、羽根をふくらませて暖めてやりました。しばらくするとカラスはその黒い、小さな丸い目をぱっちりとあけました。

目をさましたカラスは昨日の夜、月につれられて宇宙を見たことを思い出しました。そして心配そうにのぞきこむクラスメイトを見ました。カラス君は思わずにっこりしました。楽しいゆめを見ていると思ったのです。

「カラス君、大丈夫？」

「寒くなあい？」

「ごめんね、いじわるして」

「ちゃんと飛べるかなぁ？」

「みんなでおうちに帰ろう」

カラスはみんなの声を聞くと夢でないとわかり、ビックリしました。

でもおどろきはやがてうれしさにかわり、カアカアと声をあげました。



「ねえみんな、 僕はタベ素晴らしいものをみたんだ。 もう二度と見ることは出来ないけれど、
僕の心は決してそれを忘れないよ。 ぼくはそれをみんなに話して聞かせたいんだ」

カラスは夢を見ているような、 遠いあこがれをふくんだまなざしをしていました。

小鳥たちはカラスがいつもと違ってみえました。

さびしそうな、 悲しそうなカラスが生き生き輝いて見えたのです。

みんなカラスの話を聞いてみたいと思ったのです。



いくつもの春がやってきては、過ぎていきました。フクロウ先生はすっかり年老いて、一日中木のウロで居眠りを楽しむようになりました。

小鳥の学校では新しい先生が教えています、黒い精悍な翼を持ち、丸い目にやさしさと知恵のきらめきをたたえたカラスでした。カラスの先生は毎年やってくる子どもたちに、いつも不思議な話をしてくれました。それは夜の空にきらめく幾万もの星たちのお話でした。

「先生は君たちくらいの時にとても悲しいことがあって、夜の森で迷ってしまったことがあるんだ。その時、不思議なことに月が僕を宇宙に連れて行ってくれたんだよ、宇宙は美しさに満ちていた。」

「朝つゆに光があたるとキラキラかがやくだろう？それよりももっと強く冷たく輝く星達が、何千と見えたんだ。さそりのしっぽの先には赤く輝く星、空には大きなひしゃくがかかり今にも水がこぼれそうに傾いていた。ほうき星がうなりをあげてそばを駆け抜けていたし、母犬が仔犬をつれて走っていた。」

「星は本当に遠い遠いところにあって、届くまでに光は何年も何年も宇宙を旅してきたんだよ。お日様に照らされたこの世界はとても美しい、何もかもが生き生きとして動いている。でも、お月様が支配する夜の空は静けさに満ちている。その夜をたくさん星達が飾っているんだよ。まるで野原に咲くきんぽうげやひなげしのようにね。」

先生の話を何度も何度も聞くうちに、子供達の心に小さな宇宙が生まれました。その宇宙は毎日成長して、子供達の心をみたしました。バラ色の星雲や青白いほうき星のかけまわる幻の宇宙です。小鳥達は夜になると夢のなかで宇宙を思いっきり飛び回って遊びました。



夜が明けてお日様の光が東の空を染め始める頃、 小鳥達は 「生きる喜び」 と 「朝の目ざめ」 を感謝して、 力いっぱいさえずります。

朝の光とともに、小鳥達の喜びの唄に地上は満たされ、 皆新しい一日が始まったことを知りました。 翼を広げ、 高く低く自由に空をかけ巡る鳥達を見て、 地を這うけものたちは思わず叫びました。

「あー、 いつか鳥のように自由に飛べたならなあ…」

たとえ翼はもてなくとも、 人の心は自由に世界中を飛びまわれるのです。 そしていつの日かそれぞれの心の中に芽生えた小さな夢を実現するために、 子供達は大きく羽ばたくのです。

空の高みから月は静かな眠りについた地上を見下ろして、 あらゆるもの、 子供達がやすらかな眠りにつくのを見守ってきました。

「みんな楽しい夢をたくさん見ておとなになるんだよ」

お月様はそういうと、 そっとほほえまれました。



カラスくん
原作 97.10.5 作絵 06.12